

令和4年度 第1回社会教育委員会議 会議録（要旨）

- 1 日 時：令和4年5月19日（木）10:00～12:00
- 2 場 所：北九州市立生涯学習総合センター 3階ホール
- 3 出席者 委員 野依議長 他 13名
事務局 市民文化スポーツ局長 柏井 他21名
事例発表者 1名

4 議題、議事の概要

- (1) 市民文化スポーツ局長あいさつ
- (2) 議題
 - ア 令和4年度生涯学習推進計画の主要事業について
 - イ 令和4年度の社会教育関係団体補助金について
 - ウ 協議テーマに関する意見交換
 - ① 地域のデジタルデバイド対策について
 - ② 実施事例発表
 - ③ グループワーク

5 主な質疑応答、意見等

議題（ア）令和4年度生涯学習推進計画の主要事業について

（事務局：事業について説明）

委員： 個々の事業は、社会教育、生涯学習にとって重要なものだと思っているが、予算額の差が目につく。例えば、北九州市立大学（の事業）には予算が全くついていないが、地域づくり・人づくりに対する影響は大きいと思う。各事業が地域づくり・人づくりにどう影響を及ぼしたか、要は予算の乗数効果はどうかということが気になる。

ボランティアやサポーターを作るような事業がいくつかあったが、そういう方たちが地域の活動に入っていくこと、結果的に追加予算をかけなくても生きがいの追求も含めて活動していただけるようになることは、非常に地域への波及が大きいと思う。ボランティア、サポーターの育成は、最初は予算をかけても効果があるかと思う。一旦予算がついてしまうと、前例踏襲しがちという面があるのはわかるが、そうした視点でも今後は注目していきたい。

事務局： 今回は令和4年度の事業予定を説明したが、ご指摘のあった令和3年度の実績については次回会議でご報告する。

委員： 市民目線に立って、多岐にわたって準備しており、非常に素晴らしいと感じる。

特に、新科学館スペース LABO については、北九州市は第 2 次産業、製造業の街なので、子どもたちに、これから理系への興味を持っていただくということで、経済界としても非常に興味がある。是非、入場が増えるように工夫し、毎日満杯という状態になれば、と関心を持っている。

事務局： スペース LABO は、4 月 28 日の開館以来、連日満員に近い状態が続いていると聞いている。担当課に委員の言葉を伝え、来館者増となる施策を実行するよう伝える。

議題（イ）令和 4 年度の社会教育関係団体補助金について

（事務局：補助金について説明）

議題（ウ）協議テーマに関する意見交換

（事務局：① 北九州市の地域のデジタルデバインド対策について説明）

② 事例発表

「企救丘市民センター『デジタル化への対応』に関する取組み

～コロナ禍での地域づくりとコミュニケーションのあり方～(企救丘市民センター)」

館長： 「企救丘センターの『デジタル化への対応』に関する取組み」について事例発表する。

小倉南区企救丘校区は、最寄駅がモノレール志井駅で、人口は1万2,662名、小学校692名、中学校598名である。スローガンは「声かけて子どもの育つ企救丘」。非常に子ども世帯が多いところで、子育てしやすい街を目指す校区となっている。

企救丘校区は、新型コロナウイルス感染症により令和2年1月から市民センターの活動がストップした。その間に、職員が Zoom 講座や動画の編集講座を各自学び、そしてオンライン講座をやろうという声が上がった。

令和2年度は陶芸講座、ズンバ講座、3年度は骨カルシウム講座を実施した。その中で、お家時間、ステイホームを楽しもうという陶芸講座の紹介をする。

この講座は、チラシのQRコードからスマホで申し込みができるようにした。一番大切にしたのは、ヒアリングシート、聞き取りである。申し込み時に、自宅にインターネットできる環境があるか、Wi-Fi環境はあるか、オンライン講座で使用する機器は何か、などをきちんと聞き取りをして、オンライン講座ができるかを確認した上で、申し込みを受け付けた。

申込者には、あらかじめ市民センターに粘土や道具を取りに来てもらってから講座に参加していただくという方法を取った。

講師にとっても初めてのオンライン講座で、非常に緊張していたが、時間をかけてリハーサルをしたので、当日は非常にスムーズに実施できた。

オンラインでの参加者のほか、会場にも 10 名ほど参加者がおり、ハイブリッドで講座をおこなった。

後日、作品を焼いて、市民センターに取りに来てもらうことで、また市民センターを利用する方も増えていくようにした。

このようにオンライン講座を実施したが、やはりオンラインで参加する方はどうしても若い世代になる。やはりシニア世代の方にもオンライン講座を体験していただきたいということを思った。

今はどこもそうだが、高齢化とデジタル化が同時に進行する社会である。コロナ禍の中で、機器を使えない方々たちが、どうしても取り残されてしまう。コロナワクチンの予防接種予約の時、窓口の混乱があった。高齢者の方も孫や子がネットを扱える環境であれば、申し込みができるが、そうでなければ予約ができない。デジタルデバインド状態である。

東京都の健康長寿医療センターの調査結果では、コロナ禍で高齢者に社会的孤立に陥る人が多いのは、若者に比べて SNS やインターネットを利用する人が少ないことが背景にあるということである。やはりデジタルデバインド、情報格差をどうするかということが課題になってくると思う。

私たち市民センターにどのようなことができるのかと考え、docomo に講座をお願いした。市からもソフトバンクなど他の携帯電話会社が行う講座を紹介され、実施した。

「元気で GO! GO! 生き生きスマホ講座」という講座は、「あるくっちゃ KitaQ」という北九州市のアプリに関わるだけでなく、「さくら」という雑誌の編集もされている方をお願いした LINE 講座である。シニア世代の方も LINE は結構使っているため、講座をお願いした。

令和 3 年度は、(シニア対象のスマホ講座は) 計 15 回開催し、令和 4 年度も開催することになっている。

しかし、講座をしたからといってすぐに使えるようになるわけではない。やはり定期的にしなないといけないという声が、職員から出た。自分たちが少しずつ教えることができないかと考え、令和 3 年 9 月から毎週水曜日に、職員が教える「スマホカフェ」を開催している。予約制ではないのでいつでも来てくださいと言っていたら、結構な人数となり、希望者が増えてきている。

企救丘市民センターは、市民ホールが非常に開放的になっており、本当にカフェのように、くつろぎながら、無駄話をしながら、スマホだけでなく他の相談などもあり、楽しく時間を過ごしている。

その他の取組みとしては、コロナ禍だからこその子育て支援として、企救丘のオリジナル絵本を毎月アップした。

これは、子育てサポーターのベジタブルというグループが、「あなたの声で、

あなたのスピードで、あなたの読み方で、あなたの大切な人に読んでください」ということで作成したオリジナル絵本である。(コロナ禍で) 家の中に閉じこもっているお母さんがお子さんに読んで聞かせてあげてほしい、何とかして市民センターとお母さんたちとの繋がりも途切らせたくないという思いで作成し、これを企救丘校区の Y o u T u b e と企救丘市民センターのホームページから見られるようにした。ぜひ見ていただきたいと思っている。

今後の取り組み・課題は、デジタル人材育成である。やはり使える人が増えなければ進んでいけないと思っている。

学生とシニア世代の地域参加ということで、高齢者のスマホ利用者を増やすだけでなく、学生のデジタルスキルを地域活動に生かしながら参加してほしいと考えている。

この学生の地域参加については、令和3年10月に北九州市立大学の学生主催の「きっかふえ」というイベントを企救丘市民センター市民ホールで開催した。市民ホールを会場、その隣の会議室をスタジオに見立て、会場とスタジオを Zoom で結んで、テレビ中継のようにした。スタジオの方が、「会場の皆さん、地域の何か悩み事があったら私たちに聞かせてください、解決しますよ。」と呼びかけて、会場とやりとりをし、みんなで地域課題を解決していこうというイベントであった。一つの会場で行えば簡単に済むことだが、デジタル機器を使用すると、遠く離れた海外であろうがどこであろうがこのようなことができるという体験を地域の方にしてもらうことが目的であった。

知らず知らずのうちにデジタル体験をやってるんだ、自分たちはこういうことができるんだ、ということを経験することは非常に重要だと思った。参加者も喜んで、貴重な体験だったという意見もいただいている。学生のデジタルスキルを活かした地域参加である。

先ほどご紹介したスマホカフェは、職員が教える側、シニア世代が習う側、となっているが、スマホは使用しているうちに結構使えるようになってくる。ということは、シニア世代の方も教えることができるのではないかと、シニア世代の人が新しく来た人たちに教えたかどうか、と考えた。

そこで、(教えることができる人を) スマホカフェのスタッフとして認定し、職員が認定書を作成して交付した。みんなと一緒に、学びの環というか、教えられていた人たちが教える側に回り、そして生きがいがづくりになる。皆さんが生き生きしながら、毎週水曜日にきていただけるので、なかなかいいのではないかと考えている。

課題としては、インターネット詐欺で、本当に気を付けないといけない問題である。そのため、デジタルリテラシーをいかに高めるかということが、今後の課題になってくるかと思う。

【デジタルデバイド対策の説明および事例発表についての質疑応答】

委員： 私は企救丘地区に在住しているが、企業に勤めていて、子どもの講座で夏休

みなどに市民センターに連れて行くことはあっても送迎だけで、市民センターの中に入ることはあまりなかった。

大学、若者、企業を含めて、どう巻き込んでいくか。従来の公民館的な活動だけじゃないところの役割が、今、ますます市民センターに求められている。それをどう拡大していくかを、最近も意見交換したところである。

委員： デジタル市役所推進課の説明で、全市民センターに Wi-Fi ルーターを整備予定と言っていたが、各区生涯学習センターに配備する考えはあるか。

事務局： （市民センターに配備する）無償の Wi-Fi ルーターは、例えば家に Wi-Fi の環境がない生徒が、オンラインの勉強ができる環境を整備するなどの地域 BWA*を活用する事業者を公募した結果である。市民センター等に無償の Wi-Fi ルーターを置くことを主眼として始めた事業ではない。

提案を採択した企業から、100 台程度を無償提供するという申し出があり、では、市民センターでぜひ活用しようと、今、取り組みしているところであるが、生涯学習センターまではカバーできていないのが実情である。

※ 地域 BWA：通信事業者が特定の周波数帯を使って、市町村において地域の公共サービス向上等に資する高速データ通信を行うサービス

委員： 所属団体で、毎月一回定例会をするが、新型コロナ蔓延防止で生涯学習センターが使用できなくなったことがあった。その時、Zoom で開催しようとしたが、Wi-Fi 環境がない方が多くできなかったため、生涯学習センターでもできたらと思って質問した。

③ グループワーク

出席委員 14 名が A、B、C の 3 グループに分かれ、各グループにファシリテーターとして社会教育主事が 1 名ずつ入り、グループワークを行った。

「地域のデジタル化の推進についてどのような学びや工夫が必要か」、「どのように『地域づくり・人づくり』に繋げていくか」について意見を出した。

【グループワーク内容の発表】

A グループ： デジタル化の推進のためにどのような学びや工夫が必要かについて、（事例発表の）企救丘の認定証を発行して教える人を育てるという取り組みは大変いい。

ただ、それだけでなく、できるようになった人のどこをどのように広げていくか、また、市民センター内だけでなく出向くなど、困ったときにすぐ対応できるようなネットワークづくりができればもっといいのではないかと意見が出た。

そのように、個々で繋がっていくことにより、気軽に学べたりするところがいいと思う。今は最低限スマホを持っている人しか参加できないため、持って

いない人にいかに参加してもらうか、そのきっかけづくりを考えていく必要があるのではないか。

次に、どのように地域づくり人づくりに繋げていくかであるが、やはりスマホカフェは大変いい取り組みである。市民センターに行ったついでに、スマホのことだけではなく、他のことも相談できる、話すことができるという関係づくりはとても大事である。その学びから活動への仕組みづくりができて、学んだ人が教える側になっていく、地域の人材が次々にできていくことは大変良い。

そしてネットワークづくり。市民センターを中心にするというより、個別にでも繋がっていけるような仕組みづくり、個々の繋がりを作っていくことができる、より地域の繋がりができていくのではないか。

そして、地域の情報を発信することで、顔を合わせて話をするとはできなくても、地域のことを知るきっかけになる。地域に関わってみようという人が増えていくと思う。

館長が問題意識を持ち、情報発信が大事だと考えている市民センターは（取り組みを）しているが、全館が実施する仕組みづくりをしていくことで、市全体のデジタル化を進めていくことができるのではないか。

また、学生の参画を増やして、若い人たちが市民センターや地域に関わるきっかけにしていくことが、地域の活性化に繋がっていくと思う。

課題としては、繋がらない人をどうしていくのか、誰1人取り残さないために、どのように繋げていくかということが大きな課題という意見が出た。

B グループ： このグループでは、デジタルを子育て世代と高齢者世帯、二つに分けて考えてみた。

子育て世代に対しては、学校一斉メール活用してはどうかというご意見が出たが、学校一斉メールは緊急時に使用するという前提があるので、学校の立場としては難しいということになった。ただ、例えば市民センターだよりやチラシなどを保護者に配ることはできるので、そういったものを活用してはどうかという意見が出た。

高齢者についても、子どもたちから教えてもらおうと、高齢者と子どもたちが繋がるきっかけづくりにもなるかもという話があった。

また、市民センターに足を運ばない人にどのような工夫をしたらいいのか、ここに来ると情報があるということをどのように知ってもらったらいいのかという話が出た。

工夫するところとしては、やはり広報が一番必要なのではないか。例えば、デジタルでは市民センターに来た方に LINE 登録してもらってそれを使う方法、アナログでは市民センター前の掲示板。掲示板を見てくれるような工夫、掲示の仕方も必要であろう。

また、事業としては（発表事例の）認定証を発行することは、その人の励みになるので、そのようなものを活用するのはとてもいいことではないかとい

う話が出た。

また、スマホ講座に来なくても既に使える人に、その技術を市民センターで知らない人に教えてもらうために、どうすれば来てもらえるのか、そして、できない人とできる人をどうやって繋いでいくかということも大切なのではないか。

市民センターで講座を実施する上で、デジタルの場合はスキルに差があるので、そのスキルに応じた講座の企画をしていかなければいけない。できるようになった人には、次のステップの講座を提供できるような企画も必要なのではないか。

しかし、誰でも最初からできるわけではない。最初のきっかけはリアルからだと思う。リアルのチラシなどをきっかけに来ていただいて、そこからデジタルの良さ、便利さ等を知ってもらうのもいい。

今回、市民センターの職員がスマホカフェなどを発案したと事例で発表されていた。市民センターの職員は地域の方で、そのような発案はその方たちの地域愛だと思う。その地域愛はとても大切で、それを受けとめる館長のスキルや質、心構えといったものも大切である。

C グループ： 地域デジタル化の推進についての学びや工夫は、社会的孤立を防ぐために早く取り組む必要がある。

(デジタルの)市民サービスが向上していくと、便利なら自分も使えるようになりたいと、多くの人が使おうという意欲を持つのではないか。

地域によって今はまだ温度差があるため、できるところからしていくこと、そして長く続けることが大事である。予算がなくても続けられる工夫をしていくことが必要ではないか。

そして、スマホはそれぞれ機種が違うこともあり、教える人を増やしていくことは大事である。

また、教わる人が継続していくためには、教わった経験で自分にとってプラスになったこと、例えば孫と直接話ができてうれしかったなど、自分にとってよかったということの経験をすることでさらに学ぶ、という学びの積み重ねができるのではないか。ただし、デジタルの安全面の工夫が必要である。

デジタルを教える人を増やすということには、大変な可能性があると思う。スマホの使い方を人に教えるということは、自分が今、していることを人に教えるということなので、教える人が次々に増えていき、その方を巻き込んでいく(ことができる)。

例えば、高齢者が学んで、その人が高齢者に教えると、身近な人材なので、安心して受講できる、質問しやすいのではないか。そこを今は学生がサポートしているということだが。少しできる人ができない人に教えてあげられるのが、デジタルの強みではないか。

そして、若い人、学生さんが特別な知識がなくても社会に貢献できる分野ではないか。そういうことで学生の自尊感情ができてくる。大学は今、研究、教

育、地域貢献を行っているが、学生が若い時からそういうこと（社会貢献）を経験することで、将来の人材につながっていくのではないか。

【議長総括】

議長： 充実した意見交換ができたと思う。

企救丘のスマホカフェ、認定証を発行すること、そして学生を活用すること、この3点がやはり先進的な取り組みで、他地域へ広がっていけばいいと思う。

それによって、世代を超えた学び合いができる、教えられる側が教える側にまわる、そういう循環ができるということ、そして、子育て世代を通して学校と市民センターの連携というものが図れるということ、このようないろいろな利点も見えたかと思う。

残った課題としては、長く生涯学習、社会教育の課題である、繋がらない人をどう繋げるかということである。また、関心のある館長だけではなく、もっと取り組む館を増やしていく必要があるということ。そして、リテラシーの課題。そういった今後のいろんな問題にもどのように対処していくか、その三つが今後の課題だと思う。

本日のグループワークを通して、地域づくり、人づくりに繋がる、いろいろな議論ができたと思う。